

23 日 獣 発 第 233 号
平成 23 年 10 月 19 日

地方獣医師会会長 各位

社団法人 日本獣医師会
会 長 山 根 義 久
(公印及び契印の押印は省略)

牛疫に関する特定家畜伝染病防疫指針等の作成及び公表について

このことについて、平成 23 年 10 月 7 日付け 23 消安第 3577 号をもって、農林水産省消費・安全局動物衛生課長から別添写しのとおり通知があったのでお知らせします。

このたびの通知は、同日付けで下記の特定家畜伝染病防疫指針が作成・公表された旨、通知があったものです。関係会員等への周知方お願いします。

記

- 1 牛疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成 23 年 10 月 7 日農林水産大臣公表）
- 2 牛肺疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成 23 年 10 月 7 日農林水産大臣公表）
- 3 アフリカ豚コレラに関する特定家畜伝染病防疫指針（平成 23 年 10 月 7 日農林水産大臣公表）

農林水産省ホームページURL：

(※) http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/eisei/e_koutei/kaisei_kadenhou/index.html

本件内容のお問合せ先

日本獣医師会事業担当 長野

TEL 03-3475-1601



23消安第3577号
平成23年10月7日

社団法人 日本獣医師会会長

農林水産省消費・安全局動物衛生課長

牛疫に関する特定家畜伝染病防疫指針等の作成及び公表について

平素から家畜衛生行政に対して御理解と御協力を頂き感謝申し上げます。

標記のことにつきまして、本日付けで以下の特定家畜伝染病防疫指針が作成・公表されましたので、お知らせいたします。農林水産省のホームページ（※）にも掲載しておりますので併せて御確認ください。

- ① 牛疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月7日農林水産大臣公表）（別紙1）
- ② 牛肺疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月7日農林水産大臣公表）（別紙2）
- ③ アフリカ豚コレラに関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月7日農林水産大臣公表）（別紙3）

（※）http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/eisei/e_koutei/kaisei_kadenhou/index.html



牛疫に関する特定家畜伝染病防疫指針

〔平成23年10月7日〕
農林水産大臣公表

前文

- 1 牛疫は、国際連合食糧農業機関（FAO）などの国際機関が「国境を越えてまん延し、発生国の経済、貿易及び食料の安全保障に関わる重要性を持ち、その防疫には多国間の協力が必要となる疾病」と定義する「越境性動物疾病」の代表例である。
- 2 牛疫は、伝播力が強いことから、ひとたびまん延すれば、
 - ① 長期にわたり、畜産業の生産性を低下させ、
 - ② 国民への畜産物の安定供給を脅かし、
 - ③ 地域社会・地域経済に深刻な打撃を与え、
 - ④ 国際的にも、牛疫の非清浄国として信用を失うおそれがある。
- 3 平成23年6月、FAO及び国際獣疫事務局（OIE）は、牛疫の世界的な撲滅を宣言しており、今後、研究機関における牛疫ウイルスの安全な保管のための措置について協議していくこととしている。
- 4 他方で、何らかの原因で牛疫が再興する可能性を完全には否定できないことから、家畜（牛、水牛、鹿、めん羊、山羊、豚及びいのししをいう。以下同じ。）の所有者（当該家畜を管理する所有者以外の者がいるときは、その者。以下同じ。）と行政（国、都道府県及び市町村）及び関係団体とが緊密に連携し、実効ある防疫体制を構築する必要がある。
- 5 なお、本指針については、海外における発生の状況の変化や科学的知見・技術の進展等があった場合には、随時見直す。また、少なくとも、3年ごとに再検討を行う。

第1 基本方針

口蹄疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月1日農林水産大臣公表。以下「口蹄疫防疫指針」という。）第1を準用する。

第2 発生の予防及び発生時に備えた事前の準備

口蹄疫防疫指針第2を準用する。

第3 異常家畜の発見及び検査の実施

1 家畜の所有者等から通報を受けたときの対応

都道府県は、家畜の所有者又は獣医師から、異常家畜に関する通報があり、当該通報の内容が次の①及び②のいずれにも該当する場合には、直ちに家畜防疫員を現地の農場に派遣する。

- ① 複数の家畜に40.0℃以上の発熱があり、かつ、その口腔内又は鼻腔内^{くう}に出血、びらん又は潰瘍があること。
- ② 死亡家畜が急激に増加していること。

また、通報者等に対し、当該農場の飼養家畜及び家畜の死体の移動自粛等の必要な指導を行う。

2 都道府県による臨床検査及び剖検

(1) 家畜防疫員は、1の農場に到着した後、車両を当該農場の敷地外に置き、防疫服を着用して畜舎に入り、異常家畜及び同居家畜の徹底した臨床検査を行う。その際、全ての異常家畜（異常家畜が多数の場合にあっては、代表的な数頭）の病変部位及び症状の好発部位をデジタルカメラで鮮明かつ多角的に撮影する。

(2) 家畜防疫員は、臨床検査の結果、1の①及び②に掲げる異状を確認した場合には、直ちに、都道府県畜産主務課に対し、臨床検査の結果及び死亡家畜の剖検を行う旨の連絡を行うとともに、速やかに、死亡家畜を家畜保健衛生所に運搬し、剖検を行う。その際、次の措置を講ずる。なお、当該異状が口蹄疫防疫指針第3の2の(3)に規定する特定症状に該当する場合があることに留意する。

- ① 当該死体を十分に消毒する。
- ② 原則として、密閉車両又は密閉容器を用いる。これらが無い場合には、運搬物が漏出しないよう、床及び側面をシートで覆い、さらに、運搬物を積載した後、上部もシートで覆う等の措置を講ずる。
- ③ 積込み前後に車両表面全体を消毒する。
- ④ 原則として、他の農場の付近の通行を避け、かつ、他の畜産関係車両が利用しない移動ルートを設定する。
- ⑤ 運搬後は、車両及び資材を直ちに消毒する。

(3) 都道府県畜産主務課は、(2)により剖検を行う旨の連絡を受けた場合には、異常家畜の写真、臨床検査の結果及び同居家畜の状況等の情報を添えて、直ちに農林水産省消費・安全局動物衛生課（以下「動物衛生課」という。）に報告する。

3 検体の送付

(1) 都道府県は、血液、眼瞼ぬぐい液並びに死亡家畜の脾臓及びリンパ節を検体として、適切に採材し、動物衛生課とあらかじめ協議した上で、当該検体を独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所（以下「動物衛生研究所」という。）に送付する。

(2) 都道府県は、(1)により検体の送付を行った場合には、速やかに、当該農場に関する次の疫学情報を動物衛生課に提出する。

① 飼養家畜の過去28日間の移動履歴

② 当該農場に出入りしている次の人・車両の巡回範囲

ア 獣医師、人工授精師及び削蹄師

イ 家畜運搬車両、集乳車、飼料運搬車両、死亡畜回収車両及び堆肥運搬車両

③ 堆肥の出荷先

(3) 都道府県は、(1)により検体の送付を行った場合には、直ちに次の措置を講ずる。

① 家畜伝染病予防法（以下「法」という。）第32条第1項の規定に基づき、当該農場の次に掲げるものの移動を制限する。

ア 生きた家畜

イ 生乳

ウ 採取された精液及び受精卵

エ 家畜の死体

オ 敷料、飼料、排せつ物等

カ 家畜飼養器具

② 当該農場への関係者以外の者の立入りを制限する。

- ③ 当該農場の出入口及び当該農場で使用している衣類・飼養器具を消毒する。

4 陽性判定時に備えた準備

都道府県は、3により検体を動物衛生研究所に送付した場合には、次の措置を講じ、その内容について、遅くとも動物衛生研究所が行う遺伝子検査の結果が出る前に、動物衛生課に報告する。

- (1) 当該農場における畜舎等の配置の把握
- (2) 周辺農場における家畜の飼養状況の整理
- (3) 家畜のと殺に当たる人員及び資材の確保
- (4) 患畜又は疑似患畜の死体の埋却地、焼却施設又は化製処理施設の確保
- (5) 消毒ポイントの設置場所の検討
- (6) 当該農場の所在する市町村、隣接の都道府県及び関係機関への連絡

5 その他

2から4までの措置は、家畜の所有者等からの通報によらず、家畜防疫員の立入検査等により異常家畜が発見された場合についても、同様に行うものとする。

第4 病性の判定

1 病性の判定方法

(1) 農林水産省は、次の①及び②により、病性を判定する。

① 病変部位の写真、疫学情報及び動物衛生研究所が行う次の検査の結果に基づき、専門家の意見を踏まえ、判定する。ただし、牛疫の発生が継続しており、病変部位の写真から牛疫に特有の臨床症状を明確に確認できる場合には、専門家の意見も踏まえ、当該検査の結果を待たずに、臨床症状及び疫学情報により、直ちに判定する。

ア 遺伝子検査

イ 血清抗体検査

ウ ELISA法による抗原検査

② ①の病性判定時に陽性と判定されなかったものの、動物衛生研究所が行うウイルス分離検査により陽性の結果が出た場合には、専門家の意見も踏まえ、改めて判定する。

(2) 病性判定の結果については、判定後直ちに、動物衛生課から都道府県畜産主務課に通知する。

2 患畜及び疑似患畜

病性判定の結果等に基づき、次の家畜を患畜又は疑似患畜とする。

(1) 患畜

① ウイルス分離検査により、牛疫ウイルスが分離された家畜

② 牛疫に特有の臨床症状が明確であり、遺伝子検査により牛疫ウイルスに特異的な遺伝子が検出された家畜

③ 牛疫に特有の臨床症状が明確であり、ELISA法による抗原検査により牛疫ウイルスの抗原が検出された家畜

(2) 疑似患畜

① 患畜が確認された農場で飼養されている家畜

② 牛疫に特有の臨床症状が明確であり、血清抗体検査により牛疫ウイルスに対する抗体が検出された家畜及び当該家畜が確認された農場で飼養されている家畜

- ③ 発生が継続している場合において、牛疫に特有の臨床症状が明確である家畜及び当該家畜が確認された農場で飼養されている家畜
- ④ 患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）が確認された農場（以下「発生農場」という。）で家畜の飼養管理に直接携わっている者が直接の飼養管理を行っている他の農場において飼養されている家畜
- ⑤ 疫学調査の結果等により、患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）と判定した日（発症していた日が推定できる場合にあっては、発症日。以下「病性判定日」という。）から遡って10日目の日から現在までの間に当該患畜又は疑似患畜と接触したことが明らかとなった家畜
- ⑥ 疫学調査の結果等により、病性判定日から遡って10日目の日前に患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）と接触したことが明らかとなった家畜であって、当該患畜又は疑似患畜の発症状況等からみて、患畜となるおそれがあると家畜防疫員が判断した家畜

第5 病性判定時の措置

蹄疫防疫指針第5を準用する。

第6 発生農場における防疫措置（法第16条・第21条・第23条・第25条）

蹄疫防疫指針第6を準用する。

第7 通行の制限（法第15条）

蹄疫防疫指針第7を準用する。

第8 移動制限区域及び搬出制限区域の設定（法第32条）

1 移動制限区域及び搬出制限区域の設定

蹄疫防疫指針第8の1を準用する。

2 移動制限区域及び搬出制限区域の変更

蹄疫防疫指針第8の2を準用する。

3 移動制限区域及び搬出制限区域の解除

家畜等の移動を禁止する区域（以下「移動制限区域」という。）及び家畜等の搬出を禁止する区域（以下「搬出制限区域」という。）は、次の要件のいずれにも該当する場合に解除する。

（1）移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了（と殺、死体の処理及び農場の消毒が全て完了していることをいう。以下同じ。）後17日が経過した後に実施する第11の2の（2）の清浄性確認検査により、全て陰性を確認すること。

（2）移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後28日が経過していること。

4 移動制限区域及び搬出制限区域の対象

蹄疫防疫指針第8の4を準用する。

5 移動制限区域及び搬出制限区域の対象外

蹄疫防疫指針第8の5を準用する。

第9 家畜集合施設の開催等の制限（法第33条・第34条）

蹄疫防疫指針第9を準用する。

第10 消毒ポイントの設置（法第28条の2）

蹄疫防疫指針第10を準用する。

第11 ウイルスの浸潤状況の確認

1 疫学調査

(1) 調査の実施方法

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後、速やかに、病性判定日から少なくとも28日間遡った期間を対象として、発生農場における家畜、人（獣医師、人工授精師、削蹄師等家畜に接触する者、地方公共団体職員等）及び車両（集乳車、飼料運搬車両、死亡畜回収車両、堆肥運搬車両等）の出入りに関する疫学情報を収集し、ウイルスに汚染したおそれのある家畜に関する調査を実施し、極力短期間で完了させる。

(2) 疫学関連家畜

調査の結果、次の家畜であることが明らかとなったものは、疫学関連家畜として、法第32条第1項の規定に基づき移動を禁止し、臨床症状の観察を行うとともに、患畜又は疑似患畜との接触後21日を経過した後に血清抗体検査を行う。

- ① 病性判定日から遡って11日以上28日以内に患畜と接触した家畜
- ② 病性判定日から遡って11日以上28日以内に疑似患畜（臨床症状を呈していたものに限る。）と接触した家畜
- ③ 病性判定日から遡って28日以内に発生農場に出入りした人、物又は車両が当該出入りした日から7日以内に出入りした他の農場等で飼養されている家畜
- ④ 第4の2の（2）の⑤及び⑥に規定する疑似患畜が飼養されていた農場で飼養されている家畜

2 移動制限区域内の周辺農場の調査

(1) 発生状況確認検査

都道府県は、牛疫の発生が確認された場合には、次により調査及び検査を実施する。

① 電話調査

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後直ちに、市町村と協力し、少なくとも移動制限区域内の家畜の所有者を対象に、電話等により、異常家畜の有無を確認する。なお、当該確認は、移動制限区域が解除される

までの間、随時行う。

② 立入検査

ア 都道府県は、動物衛生課と協議の上、患畜又は疑似患畜の判定後、原則として24時間以内に、少なくとも発生農場から半径1キロメートル以内の区域にある農場（鹿、めん羊、山羊、豚及びいのししにあっては、5頭以上飼養する農場及び①の電話調査で異常家畜がいることが確認された農場に限る。）及び移動制限区域内の全ての大規模飼養農場（牛（月齢が満24月以上（肥育牛（乳用種の雄牛及び交雑種の牛に限る。以下同じ。））にあっては、満17月以上）のものに限る。）及び水牛にあっては200頭以上、牛（月齢が満4月以上満24月未満（肥育牛にあっては、満4月以上満17月未満）のものに限る。）、鹿、めん羊、山羊、豚及びいのししにあっては3,000頭以上飼養する農場をいう。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、遺伝子検査及び血清抗体検査を実施するための検体（血液、眼瞼ぬぐい液並びに死亡家畜の脾臓及びリンパ節）を採材し、動物衛生研究所に送付する。

イ 都道府県は、アの検査に引き続き、移動制限区域内の農場（鹿、めん羊、山羊、豚及びいのししにあっては、5頭以上飼養する農場及び①の電話調査で異常家畜がいることが確認された農場に限る。）のうち当該検査の対象外となったものに立ち入り、臨床検査を実施する。臨床検査の結果、遺伝子検査及び血清抗体検査を実施する必要があると判断したときは、検体（血液、眼瞼ぬぐい液並びに死亡家畜の脾臓及びリンパ節）を採材し、動物衛生研究所に送付する。なお、当該検査は、原則として、同心円状に発生農場から近い順に実施する。

（2）清浄性確認検査

移動制限区域及び搬出制限区域内における清浄性を確認するため、当該移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後17日が経過した後に、当該移動制限区域内の農場（鹿、めん羊、山羊、豚及びいのししにあっては、5頭以上飼養する農場に限る。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、血清抗体検査を実施するための検体（血液）を採材し、動物衛生

研究所に送付する。

(3) 検査員の遵守事項

- (1) 及び(2)の検査を行う者は、次の事項を遵守する。
- ① 車両を当該農場の敷地の外に置き、防疫服を着用して畜舎に入ること。
 - ② 当該農場を出る際には、身体、衣服、靴、眼鏡その他の携行用具の消毒及び車両の消毒を行うこと。
 - ③ 帰宅後は、入浴して身体を十分に洗うこと。
 - ④ 立ち入った農場における臨床検査により異状が確認された場合には、遺伝子検査の結果が判明するまで、他の農場に立ち入らないこと。

3 その他

□蹄疫防疫指針第11の3を準用する。

第12 ワクチン（法第31条）

- 1 現行のワクチンは、生涯にわたって感染を完全に防御することができることから、極めて高い防疫効果がある。
他方で、ワクチン接種した場合、清浄国への復帰が遅れ、我が国の畜産物の輸出に影響を及ぼすおそれがある。
- 2 農林水産省は、次の要素を考慮して、発生農場におけると殺及び周辺農場の移動制限のみによっては、感染拡大の防止が困難と考えられる場合には、まん延防止のための緊急ワクチン接種の実施を決定する。
 - ① 通報の遅さ（病変の状態、発症畜数等）
 - ② 感染の広がり（疫学関連農場数）
 - ③ 環境要因（周辺農場数、家畜飼養密度、山・河川の有無等の地理的状況）
 - ④ 埋却を含めた防疫措置の進捗状況
- 3 農林水産省は、緊急ワクチン接種の実施を決定した場合には、直ちに、次の事項について定めた特定家畜伝染病緊急防疫指針を策定し、公表する。
 - ① 実施時期
 - ② 実施地域
 - ③ 対象家畜
 - ④ その他必要な事項
- 4 都道府県は、特定家畜伝染病緊急防疫指針に基づき、速やかに緊急ワクチン接種を実施する。その際、農林水産省は、必要十分な量のワクチン及び注射関連資材を当該都道府県に譲渡し、又は貸し付ける。

第13 消毒薬

牛痘ウイルスは、エンベロープを有するウイルスであることから、脂溶性消毒薬（アルコール等）など多くの一般的な消毒薬が有効である。

第14 家畜の再導入

蹄疫防疫指針第14を準用する。

第15 発生の原因究明

蹄疫防疫指針第15を準用する。

第16 その他

蹄疫防疫指針第16を準用する。

牛肺疫に関する特定家畜伝染病防疫指針

〔平成23年10月7日〕
農林水産大臣公表

前文

- 1 牛肺疫は、国際連合食糧農業機関（FAO）などの国際機関が「国境を越えてまん延し、発生国の経済、貿易及び食料の安全保障に関わる重要性を持ち、その防疫には多国間の協力が必要となる疾病」と定義する「越境性動物疾病」の代表例である。
- 2 牛肺疫は、伝播力が強いことから、ひとたびまん延すれば、
 - ① 長期にわたり、畜産業の生産性を低下させ、
 - ② 国民への畜産物の安定供給を脅かし、
 - ③ 地域社会・地域経済に深刻な打撃を与え、
 - ④ 国際的にも、牛肺疫の非清浄国として信用を失うおそれがある。
- 3 現在、主にアフリカ大陸において牛肺疫の発生が継続して確認されており、国際的な人・物の往来が増加していることから、今後、我が国に牛肺疫が侵入する可能性は否定できない。
- 4 このため、国民、旅行者等の協力を得て水際検疫を徹底するとともに、常に国内に牛肺疫が侵入する可能性があるという前提に立ち、家畜（牛、水牛及び鹿をいう。以下同じ。）の所有者（当該家畜を管理する所有者以外の者があるときは、その者。以下同じ。）と行政（国、都道府県及び市町村）及び関係団体とが緊密に連携し、実効ある防疫体制を構築する必要がある。
- 5 なお、本指針については、海外における発生の状況の変化や科学的知見・技術の進展等があった場合には、随時見直す。また、少なくとも、3年ごとに再検討を行う。

第1 基本方針

口蹄疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月1日農林水産大臣公表。以下「口蹄疫防疫指針」という。）第1を準用する。

第2 発生の予防及び発生時に備えた事前の準備

口蹄疫防疫指針第2を準用する。

第3 異常家畜の発見及び検査の実施

1 家畜の所有者等から通報を受けたときの対応

都道府県は、家畜の所有者又は獣医師から、異常家畜に関する通報があり、当該通報の内容が次の①及び②のいずれにも該当する場合には、直ちに家畜防疫員を現地の農場に派遣する。

① 複数の家畜に40.0℃以上の発熱及び疼痛性の強い発咳^{せき}、呼吸困難又は泌乳の停止があること。

② 複数の死亡家畜がいること。

また、通報者等に対し、当該農場の飼養家畜及び家畜の死体の移動自粛等の必要な指導を行う。

2 都道府県による臨床検査及び剖検

(1) 家畜防疫員は、1の農場に到着した後、車両を当該農場の敷地外に置き、防疫服を着用して畜舎に入り、異常家畜及び同居家畜の徹底した臨床検査を行う。

(2) 家畜防疫員は、臨床検査の結果、1の①及び②に掲げる異状を確認した場合には、直ちに、都道府県畜産主務課に対し、臨床検査の結果及び死亡家畜の剖検を行う旨の連絡を行うとともに、速やかに、死亡家畜を家畜保健衛生所に運搬し、剖検を行う。その際、次の措置を講ずる。なお、当該異状が口蹄疫防疫指針第3の2の(3)に規定する特定症状に該当する場合があることに留意する。

① 当該死体を十分に消毒する。

② 原則として、密閉車両又は密閉容器を用いる。これらが無い場合には、運搬物が漏出しないよう、床及び側面をシートで覆い、さらに、運搬物を積載した後、上部もシートで覆う等の措置を講ずる。

③ 積込み前後に車両表面全体を消毒する。

④ 原則として、他の農場の付近の通行を避け、かつ、他の畜産関係車両が利用しない移動ルートを設定する。

⑤ 運搬後は、車両及び資材を直ちに消毒する。

(3) 都道府県畜産主務課は、(2)により剖検を行う旨の連絡を受けた場合

には、異常家畜の写真、臨床検査の結果及び同居家畜の状況等の情報を添えて、直ちに農林水産省消費・安全局動物衛生課（以下「動物衛生課」という。）に報告する。

3 検体の送付

（１）家畜防疫員は、剖検の結果、肺に大理石紋様の病変を確認した場合には、当該病変部位をデジタルカメラで鮮明に撮影する。

（２）都道府県は、血液並びに死亡家畜の肺及び近傍リンパ節を検体として、適切に採材し、動物衛生課とあらかじめ協議した上で、病変部位の写真及び当該検体を独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所（以下「動物衛生研究所」という。）に送付する。

（３）都道府県は、（２）により病変部位の写真及び検体の送付を行った場合には、速やかに、当該農場に関する次の疫学情報を動物衛生課に提出する。

① 飼養家畜の過去63日間の移動履歴

② 当該農場に出入りしている次の人・車両の巡回範囲

ア 獣医師、人工授精師及び削蹄師

イ 家畜運搬車両、集乳車、飼料運搬車両、死亡畜回収車両及び堆肥運搬車両

③ 堆肥の出荷先

（４）都道府県は、（２）により病変部位の写真及び検体の送付を行った場合には、直ちに次の措置を講ずる。

① 家畜伝染病予防法（以下「法」という。）第32条第1項の規定に基づき、当該農場の次に掲げるものの移動を制限する。

ア 生きた家畜

イ 生乳

ウ 採取された精液及び受精卵

エ 家畜の死体

オ 敷料、飼料、排せつ物等

カ 家畜飼養器具

- ② 当該農場への関係者以外の者の立入りを制限する。
- ③ 当該農場の出入口及び当該農場で使用している衣類・飼養器具を消毒する。

4 陽性判定時に備えた準備

都道府県は、3により病変部位の写真及び検体を動物衛生研究所に送付した場合には、次の措置を講じ、その内容について、遅くとも動物衛生研究所が行う遺伝子検査の結果が出る前に、動物衛生課に報告する。

- (1) 当該農場における畜舎等の配置の把握
- (2) 周辺農場における家畜の飼養状況の整理
- (3) 家畜のと殺に当たる人員及び資材の確保
- (4) 患畜又は疑似患畜の死体の埋却地又は処理施設（焼却施設又は化製処理施設をいう。以下同じ。）の確保
- (5) 消毒ポイントの設置場所の検討
- (6) 当該農場の所在する市町村、隣接の都道府県及び関係機関への連絡

5 その他

2から4までの措置は、家畜の所有者等からの通報によらず、家畜防疫員の立入検査等により異常家畜が発見された場合についても、同様に行うものとする。

第4 病性の判定

1 病性の判定方法

(1) 農林水産省は、次の①及び②により、病性を判定する。

① 病変部位の写真、疫学情報及び動物衛生研究所が行う次の検査の結果に基づき、専門家の意見を踏まえ、判定する。ただし、牛肺疫の発生が継続しており、病変部位の写真から牛肺疫の病理所見を明確に確認できる場合には、専門家の意見も踏まえ、当該検査の結果を待たずに、病理所見及び疫学情報により、直ちに判定する。

ア 遺伝子検査

イ 血清抗体検査

ウ 免疫学的抗原検査

② ①の病性判定時に陽性と判定されなかったものの、動物衛生研究所が行う菌分離検査により陽性の結果が出た場合には、専門家の意見も踏まえ、改めて判定する。

(2) 病性判定の結果については、判定後直ちに、動物衛生課から都道府県畜産主務課に通知する。

2 患畜及び疑似患畜

病性判定の結果等に基づき、次の家畜を患畜又は疑似患畜とする。

(1) 患畜

① 菌分離検査により、牛肺疫菌が分離された家畜

② 牛肺疫の病理所見が明確であり、遺伝子検査により牛肺疫菌に特異的な遺伝子が検出された家畜

③ 牛肺疫の病理所見が明確であり、免疫学的抗原検査により牛肺疫菌の抗原が検出された家畜

(2) 疑似患畜

① 患畜が確認された農場で飼養されている家畜

② 牛肺疫の病理所見が明確であり、血清抗体検査により牛肺疫菌に対する抗体が検出された家畜及び当該家畜が確認された農場で飼養されている家畜

- ③ 発生が継続している場合において、牛肺疫の病理所見が明確である家畜及び当該家畜が確認された農場で飼養されている家畜
- ④ 患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）が確認された農場（以下「発生農場」という。）で家畜の飼養管理に直接携わっている者が直接の飼養管理を行っている他の農場において飼養されている家畜
- ⑤ 疫学調査の結果等により、患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）と判定した日（発症していた日が推定できる場合にあっては、発症日。以下「病性判定日」という。）から遡って28日目の日から現在までの間に当該患畜又は疑似患畜と接触したことが明らかとなった家畜
- ⑥ 疫学調査の結果等により、病性判定日から遡って28日目の日前に患畜又は疑似患畜（②及び③に掲げる家畜に限る。）と接触したことが明らかとなった家畜であって、当該患畜又は疑似患畜の発症状況等からみて、患畜となるおそれがあると家畜防疫員が判断した家畜

第5 病性判定時の措置

蹄疫防疫指針第5を準用する。

第6 発生農場における防疫措置（法第16条・第21条・第23条・第25条）

蹄疫防疫指針第6を準用する。

第7 通行の制限（法第15条）

蹄疫防疫指針第7を準用する。

第8 移動制限区域及び搬出制限区域の設定（法第32条）

1 制限区域の設定

（1）移動制限区域

- ① 都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後、動物衛生課と協議の上、速やかに、原則として、発生農場を中心とした半径1キロメートル以内の区域について、家畜等の移動を禁止する区域（以下「移動制限区域」という。）として設定する。ただし、動物衛生課と協議の上、判定前であっても牛肺疫である可能性が高いと認められる場合には、判定結果を待たずに移動制限区域を設定する。
- ② 都道府県は、発生農場における感染状況等から通報が遅れたことが明らかであり、かつ、疫学情報により既に感染が拡大しているおそれがあると考えられる場合等には、動物衛生課と協議の上、周辺の農場数、家畜の飼養密度に応じ、半径1キロメートルを超えて移動制限区域を設定する。この場合、当該発生農場の所在する都道府県全体又は当該都道府県を含めた関係都道府県全体を対象として移動制限区域を設定することもできる。

（2）搬出制限区域

都道府県は、原則として、発生農場を中心とした半径5キロメートル以内の移動制限区域に外接する区域について、家畜等の当該区域からの搬出を禁止する区域（以下「搬出制限区域」という。）として設定する。なお、（1）の②の場合には、移動制限区域の外縁から5キロメートル以内の区域について、搬出制限区域として設定する。

（3）家畜市場又はと畜場で発生した場合

都道府県は、家畜市場又はと畜場に所在する家畜が患畜又は疑似患畜と判定された場合には、動物衛生課と協議の上、次の措置を講ずる。

- ① 原則として、当該家畜市場又はと畜場を中心とした半径1キロメートル以内の区域について、移動制限区域として設定する。
- ② 当該家畜の出荷元の農場を中心として、（1）及び（2）と同様に移動制限区域及び搬出制限区域を設定する。

(4) 制限区域の設定方法

- ① 移動制限区域の外縁の境界及び搬出制限区域の外縁の境界は、市町村等の行政単位又は道路、河川、鉄道その他境界を明示するのに適当なものに基づき設定する。
- ② 移動制限区域又は搬出制限区域が複数の都道府県にわたる場合には、動物衛生課の指導の下、事前に、当該都道府県の間で十分に協議を行う。
- ③ 移動制限区域及び搬出制限区域の設定に先立ち、その都度、次の措置を講ずる。なお、事前にこれらの措置を講ずることが困難な場合には、設定後速やかにこれらの措置を講ずる。
 - ア 移動制限区域及び搬出制限区域内の家畜の所有者、市町村及び関係機関への通知
 - イ 報道機関への公表等を通じた広報
 - ウ 主要道路と移動制限区域及び搬出制限区域との境界地点での標示

(5) 家畜の所有者への連絡

都道府県は、移動制限区域及び搬出制限区域の設定を行った場合には、速やかに、当該区域内の家畜の所有者に対し、その旨及び発生農場の所在地について、電話、ファクシミリ、電子メール等により連絡する。

2 制限区域の変更

(1) 制限区域の拡大

発生状況等から、移動制限区域外での発生が多発すると考えられる場合には、動物衛生課と協議の上、移動制限区域及び搬出制限区域を拡大する。

(2) 制限区域の縮小

1の(1)の①の区域を超えて移動制限区域の設定・拡大を行った場合であって、発生状況及び周辺農場の清浄性確認の結果から、感染拡大が限定的なものとなっていることが明らかとなったときは、動物衛生課と協議の上、移動制限区域の範囲を半径1キロメートルまで縮小することができる。

3 制限区域の解除

(1) 移動制限区域

次の要件のいずれにも該当する場合に解除する。

- ① 移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了（と殺、死体の処理及び農場の消毒が全て完了していることをいう。以下同じ。）後52日が経過した後に実施する第11の2の（2）の清浄性確認検査により、全て陰性を確認すること。
- ② 移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後63日が経過していること。

(2) 搬出制限区域

第11の2の（1）の発生状況確認検査において、移動制限区域及び搬出制限区域内の全ての農場で陰性を確認した時に解除する。

4 制限の対象

(1) 生きた家畜

(2) 発生農場及び発生農場から半径1キロメートル以内の区域にある農場（第11の2の（1）の発生状況確認検査により、陰性が確認された農場を除く。）で搾乳された生乳

(3) 移動制限区域内で採取された精液及び受精卵（病性判定日から遡って63日目の日前に採取され、区分管理されていたものを除く。）

(4) 家畜の死体

(5) 敷料、飼料、排せつ物等

(6) 家畜飼養器具

5 制限の対象外

(1) 敷料等の処分のための移動

- ① 発生の状況、環境保全の観点等を勘案して、家畜防疫員が飼養家畜に臨床的な異状がないことを確認した農場の敷料、排せつ物及び家畜の死

体は、動物衛生課と協議の上、焼却、埋却、化製処理又は消毒をすることを目的に処理施設等に移動することができる。

② 移動時には、次の措置を講ずる。

- ア 移動前に、家畜防疫員が当該農場の家畜に異状がないか確認する。
- イ 原則として、密閉車両又は密閉容器を用いる。これらが確保できない場合には、運搬物が漏出しないよう、床及び側面をシートで覆い、さらに、運搬物を積載した後、上部もシートで覆う等の措置を講ずる。
- ウ 積込み前後に車両表面全体を消毒する。
- エ 原則として、他の農場の付近の通行を避け、かつ、他の畜産関係車両が利用しない移動ルートを設定する。
- オ 複数の農場を連続して配送しないようにする。
- カ 移動中は、消毒ポイントにおいて運搬車両を十分に消毒する。
- キ 移動時には、制限の対象外となっていることを証明する書類を携帯し、消毒ポイント等で提示する。
- ク 運搬後は、車両及び資材を直ちに消毒する。
- ケ 移動経過を記録する。

③ 焼却又は化製処理をする場合には、次の措置を講ずる。

- ア 運搬車両から原料投入場所までシートを敷く。
- イ 原料置場を製品置場と隔てて設置する等の措置を講ずる。
- ウ 焼却又は化製処理の完了後直ちに、処理施設の出入口から原料投入場所までの経路を消毒する。

(2) 制限区域外の家畜の死体の処理施設への移動

制限区域（移動制限区域及び搬出制限区域をいう。以下同じ。）外の本農場の家畜の死体は、動物衛生課と協議の上、移動制限区域内の処理施設に移動させることができる。この場合、移動制限区域内の本農場には立ち寄らないようにするとともに、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒するほか、(1)の③のアからウまでの措置を講ずる。

(3) 制限区域外の家畜等の通過

制限区域外の農場の家畜等について、制限区域を通過しなければ、制限区域外の他の農場、と畜場等の目的地に移動させることができない場合には、動物衛生課と協議の上、制限区域を通過させることができる。この場合、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒する。

(4) その他

(1) から (3) までに規定するもののほか、原則として、制限区域の設定後63日間は、制限の対象外を設けないこととするが、当該63日間経過後、発生状況、移動に伴う病原体の拡散防止措置等の状況を勘案して、動物衛生課と協議の上、次のとおり制限の対象外を設けることができる。この場合、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒する。

- ① 移動制限区域内のと畜場の事業を再開すること。ただし、と畜する家畜は、農場からと畜場に直行する家畜のみとする。
- ② 移動制限区域外から移動制限区域内へ家畜を移入すること。

第9 家畜集合施設の開催等の制限（法第33条・第34条）

蹄疫防疫指針第9を準用する。

第10 消毒ポイントの設置（法第28条の2）

蹄疫防疫指針第10を準用する。

第11 病原体の浸潤状況の確認

1 疫学調査

(1) 調査の実施方法

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後、速やかに、病性判定日から少なくとも63日間遡った期間を対象として、発生農場における家畜、人（獣医師、人工授精師、削蹄師等家畜に接触する者、地方公共団体職員等）及び車両（集乳車、飼料運搬車両、死亡畜回収車両、堆肥運搬車両等）の出入りに関する疫学情報を収集し、病原体に汚染したおそれのある家畜に関する調査を実施し、極力短期間で完了させる。

(2) 疫学関連家畜

調査の結果、次の家畜であることが明らかとなったものは、疫学関連家畜として、法第32条第1項の規定に基づき移動を禁止し、臨床症状の観察を行うとともに、患畜又は疑似患畜との接触後56日を経過した後に血清抗体検査を行う。

- ① 病性判定日から遡って29日以上63日以内に患畜と接触した家畜
- ② 病性判定日から遡って29日以上63日以内に疑似患畜（臨床症状を呈していたものに限る。）と接触した家畜
- ③ 病性判定日から遡って63日以内に発生農場に出入りした人、物又は車両が当該出入りした日から7日以内に出入りした他の農場等で飼養されている家畜
- ④ 第4の2の（2）の⑤及び⑥に規定する疑似患畜が飼養されていた農場で飼養されている家畜

2 移動制限区域内の周辺農場の調査

(1) 発生状況確認検査

都道府県は、牛肺疫の発生が確認された場合には、次により調査及び検査を実施する。

① 電話調査

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後直ちに、市町村と協力し、少なくとも移動制限区域内の家畜の所有者を対象に、電話等により、異常家畜の有無を確認する。なお、当該確認は、移動制限区域が解除される

までの間、随時行う。

② 立入検査

都道府県は、動物衛生課と協議の上、患畜又は疑似患畜の判定後、原則として24時間以内に、少なくとも発生農場から半径1キロメートル以内の区域にある農場（鹿にあっては、5頭以上飼養する農場及び①の電話調査で異常家畜がいることが確認された農場に限る。）及び移動制限区域内の全ての大規模飼養農場（牛（月齢が満24月以上（肥育牛（乳用種の雄牛及び交雑種の牛に限る。以下同じ。）にあっては、満17月以上）のものに限る。）及び水牛にあっては200頭以上、牛（月齢が満4月以上満24月未満（肥育牛にあっては、満4月以上満17月未満）のものに限る。）及び鹿にあっては3,000頭以上飼養する農場をいう。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、遺伝子検査及び血清抗体検査を実施するための検体（血液並びに死亡家畜の肺及び近傍リンパ節）を採材し、動物衛生研究所に送付する。

（2）清浄性確認検査

制限区域内における清浄性を確認するため、移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後52日が経過した後に、当該移動制限区域内の農場（鹿にあっては、5頭以上飼養する農場に限る。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、血清抗体検査を実施するための検体（血液）を採材し、動物衛生研究所に送付する。

（3）検査員の遵守事項

- （1）及び（2）の検査を行う者は、次の事項を遵守する。
- ① 車両を当該農場の敷地の外に置き、防疫服を着用して畜舎に入ること。
 - ② 当該農場を出る際には、身体、衣服、靴、眼鏡その他の携行用具の消毒及び車両の消毒を行うこと。
 - ③ 帰宅後は、入浴して身体を十分に洗うこと。
 - ④ 立ち入った農場における臨床検査により異状が確認された場合には、遺伝子検査の結果が判明するまで、他の農場に立ち入らないこと。

3 その他

□蹄疫防疫指針第11の3を準用する。

第12 ワクチン（法第31条）

現行のワクチンは、牛肺疫の発症の抑制に効果があるものの、感染を完全に防御することはできないため、無計画・無秩序なワクチンの使用は、牛肺疫の発生又は流行を見逃すおそれを生ずることに加え、清浄性確認のための抗体検査の際に支障を来し、清浄化を達成するまでに長期間かつ多大な経済的負担や混乱を招くおそれがある。

国際獣疫事務局（OIE）も、「アフリカ等のまん延地帯ではワクチンの使用は極めて有効であるが、清浄国ではサーベイランスの阻害要因となるので使用すべきではない」としている。

このため、ワクチンは、原則として使用しない。

第13 消毒薬

牛肺疫菌は、マイコプラズマであることから、次亜塩素酸ナトリウムなど日常使用している消毒薬が有効である。

第14 家畜の再導入

□蹄疫防疫指針第14を準用する。

第15 発生の原因究明

□蹄疫防疫指針第15を準用する。

第16 その他

□蹄疫防疫指針第16を準用する。

アフリカ豚コレラに関する特定家畜伝染病防疫指針

〔平成23年10月7日〕
農林水産大臣公表

前文

- 1 アフリカ豚コレラは、国際連合食糧農業機関（FAO）などの国際機関が「国境を越えてまん延し、発生国の経済、貿易及び食料の安全保障に関わる重要性を持ち、その防疫には多国間の協力が必要となる疾病」と定義する「越境性動物疾病」の代表例である。
- 2 アフリカ豚コレラは、伝播力が強いことから、ひとたびまん延すれば、
 - ① 長期にわたり、畜産業の生産性を低下させ、
 - ② 国民への畜産物の安定供給を脅かし、
 - ③ 地域社会・地域経済に深刻な打撃を与え、
 - ④ 国際的にも、アフリカ豚コレラの非清浄国として信用を失うおそれがある。
- 3 現在、
 - ① 主にアフリカ大陸においてアフリカ豚コレラの発生が継続していること
 - ② 近年、東欧地域でもアフリカ豚コレラの発生が確認されていること
 - ③ 国際的な人・物の往来が増加していることから、今後、我が国にアフリカ豚コレラが侵入する可能性は否定できない。
また、アフリカ豚コレラは、かつて我が国に常在化していた豚コレラとの類症鑑別上、重要な疾病である。
- 4 このため、国民、旅行者等の協力を得て水際検疫を徹底するとともに、常に国内にアフリカ豚コレラが侵入する可能性があるという前提に立ち、家畜（豚及びいのししをいう。以下同じ。）の所有者（当該家畜を管理する所有者以外の者があるときは、その者。以下同じ。）と行政（国、都道府県及び市町村）及び関係団体とが緊密に連携し、実効ある防疫体制を構築する必要がある。
- 5 なお、本指針については、海外における発生の状況の変化や科学的知見・技

術の進展等があった場合には、随時見直す。また、少なくとも、3年ごとに再検討を行う。

第1 基本方針

口蹄疫に関する特定家畜伝染病防疫指針（平成23年10月1日農林水産大臣公表。以下「口蹄疫防疫指針」という。）第1を準用する。

第2 発生の予防及び発生時に備えた事前の準備

口蹄疫防疫指針第2を準用する。

第3 異常家畜の発見及び検査の実施

1 家畜の所有者等から通報を受けたときの対応

都道府県は、家畜の所有者又は獣医師から、アフリカ豚コレラの類症疾病である豚コレラを疑う症状を呈している家畜を発見した旨の通報を受けた場合には、農林水産省消費・安全局動物衛生課（以下「動物衛生課」という。）に報告するとともに、豚コレラに関する特定家畜伝染病防疫指針（平成18年3月31日農林水産大臣公表。以下「豚コレラ防疫指針」という。）に基づき対応する。

2 検体の送付

（1）都道府県は、豚コレラ防疫指針第2の1の（5）による病性鑑定におけるウイルス学的検査（遺伝子検査、蛍光抗体法による抗原検査及びウイルス分離検査をいう。以下同じ。）の結果、豚コレラの感染が否定された場合には、動物衛生課とあらかじめ協議した上で、検体（血清、抗凝固剤加血液並びに死亡家畜の扁桃、脾臓及び腎臓）を独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所（以下「動物衛生研究所」という。）に送付する。また、都道府県は、必要に応じ、類症鑑別上問題となる他の疾病に関する検査を行う。

なお、都道府県は、必要に応じ、ウイルス学的検査の結果が出る前に、動物衛生課とあらかじめ協議した上で、当該検体の送付及び類症鑑別上問題となる他の疾病に関する検査を行うことができる。

（2）都道府県は、（1）により検体の送付を行った場合には、速やかに、当該農場に関する次の疫学情報を動物衛生課に提出する。

- ① 飼養家畜の過去22日間の移動履歴
- ② 当該農場に出入りしている次の人・車両の巡回範囲
 - ア 獣医師及び人工授精師
 - イ 家畜運搬車両、飼料運搬車両、死亡畜回収車両及び堆肥運搬車両
- ③ 堆肥の出荷先

（3）都道府県は、（1）により検体の送付を行った場合には、直ちに次の措置を講ずる。

- ① 家畜伝染病予防法（以下「法」という。）第32条第1項の規定に基づき、当該農場の次に掲げるものの移動を制限する。
 - ア 生きた家畜
 - イ 採取された精液及び受精卵
 - ウ 家畜の死体
 - エ 敷料、飼料、排せつ物等
 - オ 家畜飼養器具
- ② 当該農場への関係者以外の者の立入りを制限する。
- ③ 当該農場の出入口及び当該農場で使用している衣類・飼養器具を消毒する。

3 陽性判定時に備えた準備

都道府県は、2により検体を動物衛生研究所に送付した場合には、次の措置を講じ、その内容について、遅くとも動物衛生研究所が行う遺伝子検査の結果が出る前に、動物衛生課に報告する。

- (1) 当該農場における畜舎等の配置の把握
- (2) 周辺農場における家畜の飼養状況の整理
- (3) 家畜のと殺に当たる人員及び資材の確保
- (4) 患畜又は疑似患畜の死体の埋却地又は処理施設（焼却施設又は化製処理施設をいう。以下同じ。）の確保
- (5) 消毒ポイントの設置場所の検討
- (6) 当該農場の所在する市町村、隣接の都道府県及び関係機関への連絡

4 その他

2及び3の措置は、家畜の所有者等からの通報によらず、家畜防疫員の立入検査等により異常家畜が発見された場合についても、同様に行うものとする。

第4 病性の判定

1 病性の判定方法

(1) 農林水産省は、次の①及び②により、病性を判定する。

① 病変部位の写真、疫学情報及び動物衛生研究所が行う次の検査の結果に基づき、専門家の意見を踏まえ、判定する。ただし、アフリカ豚コレラの発生が続発しており、病変部位の写真からアフリカ豚コレラの臨床症状を明確に確認できる場合には、専門家の意見も踏まえ、当該検査の結果を待たずに、臨床症状及び疫学情報により、直ちに判定する。

ア 遺伝子検査

イ 血清抗体検査

ウ 蛍光抗体法による抗原検査

② ①の病性判定時に陽性と判定されなかったものの、動物衛生研究所が行うウイルス分離検査により陽性の結果が出た場合には、専門家の意見も踏まえ、改めて判定する。

(2) 病性判定の結果については、判定後直ちに、動物衛生課から都道府県畜産主務課に通知する。

2 患畜及び疑似患畜

病性判定の結果等に基づき、次の家畜を患畜又は疑似患畜とする。

(1) 患畜

① ウイルス分離検査により、アフリカ豚コレラウイルスが分離された家畜

② アフリカ豚コレラを疑う臨床症状を示しており、遺伝子検査によりアフリカ豚コレラウイルスに特異的な遺伝子が検出された家畜

③ アフリカ豚コレラを疑う臨床症状を示しており、血清抗体検査によりアフリカ豚コレラに対する抗体が検出された家畜

④ アフリカ豚コレラを疑う臨床症状を示しており、蛍光抗体法による抗原検査によりアフリカ豚コレラウイルスの抗原が検出された家畜

(2) 疑似患畜

① 患畜が確認された農場で飼養されている家畜

- ② 発生が継続している場合において、アフリカ豚コレラの臨床症状が明確である家畜及び当該家畜が確認された農場で飼養されている家畜
- ③ 患畜又は疑似患畜（②に掲げる家畜に限る。）が確認された農場（以下「発生農場」という。）で家畜の飼養管理に直接携わっている者が直接の飼養管理を行っている他の農場において飼養されている家畜
- ④ 疫学調査の結果等により、患畜又は疑似患畜（②に掲げる家畜に限る。）と判定した日（発症していた日が推定できる場合にあっては、発症日。以下「病性判定日」という。）から遡って7日目の日から現在までの間に当該患畜又は疑似患畜と接触したことが明らかとなった家畜
- ⑤ 疫学調査の結果等により、病性判定日から遡って7日目の日前に患畜又は疑似患畜（②に掲げる家畜に限る。）と接触したことが明らかとなった家畜であって、当該患畜又は疑似患畜の発症状況等からみて、患畜となるおそれがあると家畜防疫員が判断した家畜

第5 病性判定時の措置

蹄疫防疫指針第5を準用する。

第6 発生農場における防疫措置（法第16条・第21条・第23条・第25条）

蹄疫防疫指針第6を準用する。

第7 通行の制限（法第15条）

蹄疫防疫指針第7を準用する。

第8 移動制限区域の設定（法第32条）

1 移動制限区域の設定

（1）移動制限区域

- ① 都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後、動物衛生課と協議の上、速やかに、原則として、発生農場を中心とした半径10キロメートル以内の区域について、家畜等の移動を禁止する区域（以下「移動制限区域」という。）として設定する。ただし、動物衛生課と協議の上、判定前であってもアフリカ豚コレラである可能性が高いと認められる場合には、判定結果を待たずに移動制限区域を設定する。
- ② 都道府県は、発生農場における感染状況等から通報が遅れたことが明らかであり、かつ、疫学情報により既に感染が拡大しているおそれがあると考えられる場合等には、動物衛生課と協議の上、周辺の農場数、家畜の飼養密度に応じ、半径10キロメートルを超えて移動制限区域を設定する。この場合、当該発生農場の所在する都道府県全体又は当該都道府県を含めた関係都道府県全体を対象として移動制限区域を設定することもできる。

（2）防疫区域及び監視区域

移動制限区域のうち、原則として、発生農場を中心とした半径3キロメートル以内の区域をより長期間にわたり家畜等の移動を禁止する防疫区域として、それ以外の区域を監視区域として区分する。なお、（1）の②の場合には、原則として、防疫区域を除く移動制限区域全体を監視区域とする。

（3）家畜市場又はと畜場で発生した場合

都道府県は、家畜市場又はと畜場に所在する家畜が患畜又は疑似患畜と判定された場合には、動物衛生課と協議の上、次の措置を講ずる。

- ① 原則として、当該家畜市場又はと畜場を中心とした半径1キロメートル以内の区域について、移動制限区域として設定する。
- ② 当該家畜の出荷元の農場を中心として、（1）及び（2）と同様に移動制限区域を設定する。

(4) 移動制限区域の設定方法

- ① 移動制限区域の外縁の境界は、市町村等の行政単位又は道路、河川、鉄道その他境界を明示するのに適当なものに基づき設定する。
- ② 移動制限区域が複数の都道府県にわたる場合には、動物衛生課の指導の下、事前に、当該都道府県の間で十分に協議を行う。
- ③ 移動制限区域の設定に先立ち、その都度、次の措置を講ずる。なお、事前にこれらの措置を講ずることが困難な場合には、設定後速やかにこれらの措置を講ずる。
 - ア 移動制限区域内の家畜の所有者、市町村及び関係機関への通知
 - イ 報道機関への公表等を通じた広報
 - ウ 主要道路と移動制限区域との境界地点での標示

(5) 家畜の所有者への連絡等

都道府県は、移動制限区域の設定を行った場合には、速やかに、当該区域内の家畜の所有者に対し、その旨及び発生農場の所在地について、電話、ファクシミリ、電子メール等により連絡する。また、当該区域内の家畜の所有者に対し、いのしし等の野生動物の侵入防止の徹底について指導する。

2 移動制限区域の変更

(1) 移動制限区域の拡大

発生状況等から、移動制限区域外での発生が多発すると考えられる場合には、動物衛生課と協議の上、移動制限区域を拡大する。

(2) 移動制限区域の縮小

発生状況及び周辺農場の清浄性確認の結果から、感染拡大が限定的なものとなっていることが明らかとなったときは、動物衛生課と協議の上、移動制限区域の範囲を半径5キロメートルまで縮小することができる。

3 移動制限区域の解除

(1) 防疫区域

次の要件のいずれにも該当する場合に解除する。

- ① 移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了（と殺、死体の処理及び農場の消毒が全て完了していることをいう。以下同じ。）後11日が経過した後に実施する第11の2の（2）の清浄性確認検査により、全て陰性を確認すること。
- ② 移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後22日が経過していること。

(2) 監視区域

（1）の①の検査により全て陰性を確認した時に解除する。

4 制限の対象

- (1) 生きた家畜
- (2) 移動制限区域内で採取された精液及び受精卵（病性判定日から遡って22日目の日前に採材され、区分管理されていたものを除く。）
- (3) 家畜の死体
- (4) 敷料、飼料、排せつ物等
- (5) 家畜飼養器具

5 制限の対象外

(1) 敷料等の処分のための移動

- ① 発生の状況、環境保全の観点等を勘案して、家畜防疫員が飼養家畜に臨床的な異状がないことを確認した農場の敷料、排せつ物及び家畜の死体は、動物衛生課と協議の上、焼却、埋却、化製処理又は消毒をすることを目的に処理施設等に移動することができる。
- ② 移動時には、次の措置を講ずる。
 - ア 移動前に、家畜防疫員が当該農場の家畜に異状がないか確認する。
 - イ 原則として、密閉車両又は密閉容器を用いる。これらが確保できない場合には、運搬物が漏出しないよう、床及び側面をシートで覆い、

- さらに、運搬物を積載した後、上部もシートで覆う等の措置を講ずる。
- ウ 積込み前後に車両表面全体を消毒する。
 - エ 原則として、他の農場の付近の通行を避け、かつ、他の畜産関係車両が利用しない移動ルートを設定する。
 - オ 複数の農場を連続して配送しないようにする。
 - カ 移動中は、消毒ポイントにおいて運搬車両を十分に消毒する。
 - キ 移動時には、制限の対象外となっていることを証明する書類を携行し、消毒ポイント等で提示する。
 - ク 運搬後は、車両及び資材を直ちに消毒する。
 - ケ 移動経過を記録する。

③ 焼却又は化製処理をする場合には、次の措置を講ずる。

- ア 運搬車両から原料投入場所までシートを敷く。
- イ 原料置場を製品置場と隔てて設置する等の措置を講ずる。
- ウ 焼却又は化製処理の完了後直ちに、処理施設の出入口から原料投入場所までの経路を消毒する。

(2) 移動制限区域外の家畜の死体の処理施設への移動

移動制限区域外の家畜の死体は、動物衛生課と協議の上、移動制限区域内の処理施設に移動させることができる。この場合、移動制限区域内の農場には立ち寄らないようにするとともに、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒するほか、(1)の③のアからウまでの措置を講ずる。

(3) 移動制限区域外の家畜等の通過

移動制限区域外の家畜等について、移動制限区域を通過しなければ、移動制限区域外の他の農場、と畜場等の目的地に移動させることができない場合には、動物衛生課と協議の上、移動制限区域を通過させることができる。この場合、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒する。

(4) その他

(1) から (3) までに規定するもののほか、原則として、移動制限区

域の設定後22日間は、制限の対象外を設けないこととするが、当該22日間経過後、発生状況、移動に伴うウイルスの拡散防止措置等の状況を勘案して、動物衛生課と協議の上、次のとおり制限の対象外を設けることができる。この場合、移動前後及び移動中に消毒ポイント等において運搬車両を十分に消毒する。

- ① 移動制限区域内のと畜場の再開を再開すること。ただし、と畜する家畜は、農場からと畜場に直行する家畜のみとする。
- ② 移動制限区域外から移動制限区域内へ家畜を移入すること。

第9 家畜集合施設の開催等の制限（法第33条・第34条）

蹄疫防疫指針第9を準用する。

第10 消毒ポイントの設置（法第28条の2）

蹄疫防疫指針第10を準用する。

第11 ウイルスの浸潤状況の確認

1 疫学調査

(1) 調査の実施方法

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後、速やかに、病性判定日から少なくとも22日間遡った期間を対象として、発生農場における家畜、人（獣医師、人工授精師等家畜に接触する者、地方公共団体職員等）及び車両（飼料運搬車両、死亡畜回収車両、堆肥運搬車両等）の出入り並びに飼料（食品残さを含む。）の給与状況に関する疫学情報を収集し、ウイルスに汚染したおそれのある家畜に関する調査を実施し、極力短期間で完了させる。

(2) 疫学関連家畜

調査の結果、次の家畜であることが明らかとなったものは、疫学関連家畜として、法第32条第1項の規定に基づき移動を禁止し、臨床症状の観察を行うとともに、患畜又は疑似患畜との接触後15日を経過した後に血清抗体検査を行う。

- ① 病性判定日から遡って8日以上22日以内に患畜と接触した家畜
- ② 病性判定日から遡って8日以上22日以内に疑似患畜（臨床症状を呈していたものに限る。）と接触した家畜
- ③ 病性判定日から遡って22日以内に発生農場に出入りした人、物又は車両が当該出入りした日から7日以内に出入りした他の農場等で飼養されている家畜
- ④ 第4の2の（2）の④及び⑤に規定する疑似患畜が飼養されていた農場で飼養されている家畜

2 移動制限区域内の周辺農場の調査

(1) 発生状況確認検査

都道府県は、アフリカ豚コレラの発生が確認された場合には、次により調査及び検査を実施する。

① 電話調査

都道府県は、患畜又は疑似患畜の判定後直ちに、市町村と協力し、少なくとも移動制限区域内の家畜の所有者を対象に、電話等により、異常

家畜の有無を確認する。なお、当該確認は、移動制限区域が解除されるまでの間、随時行う。

② 立入検査

ア 都道府県は、動物衛生課と協議の上、患畜又は疑似患畜の判定後、原則として24時間以内に、少なくとも発生農場から半径1キロメートル以内の区域にある農場（家畜を5頭以上飼養する農場及び①の電話調査で異常家畜がいることが確認された農場に限る。）及び移動制限区域内の全ての大規模飼養農場（家畜を3,000頭以上飼養する農場をいう。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、遺伝子検査及び血清抗体検査を実施するための検体（血液及び死亡家畜の扁桃）を採材し、動物衛生研究所に送付する。

イ 都道府県は、アの検査に引き続き、移動制限区域内の農場（家畜を5頭以上飼養する農場及び①の電話調査で異常家畜がいることが確認された農場に限る。）のうち当該検査の対象外となったものに立ち入り、臨床検査を実施する。臨床検査の結果、遺伝子検査及び血清抗体検査を実施する必要があると判断したときは、検体（血液及び死亡家畜の扁桃）を採材し、動物衛生研究所に送付する。なお、当該検査は、原則として、同心円状に発生農場から近い順に実施する。

（2）清浄性確認検査

移動制限区域内における清浄性を確認するため、当該移動制限区域内の全ての発生農場の防疫措置の完了後11日が経過した後に、当該移動制限区域内の農場（家畜を5頭以上飼養する農場に限る。）に立ち入り、臨床検査を行うとともに、血清抗体検査を実施するための検体（血液）を採材し、動物衛生研究所に送付する。

（3）検査員の遵守事項

- （1）及び（2）の検査を行う者は、次の事項を遵守する。
- ① 車両を当該農場の敷地の外に置き、防疫服を着用して畜舎に入ること。
 - ② 当該農場を出る際には、身体、衣服、靴、眼鏡その他の携行用具の消毒及び車両の消毒を行うこと。

- ③ 帰宅後は、入浴して身体を十分に洗うこと。
- ④ 立ち入った農場における臨床検査により異状が確認された場合には、遺伝子検査の結果が判明するまで、他の農場に立ち入らないこと。

3 その他

蹄疫防疫指針第11の3を準用する。

第12 ワクチン（法第31条）

アフリカ豚コレラの発症の抑制に効果的なワクチンが開発されていないことから、ワクチンは、使用しない。

第13 消毒薬

アフリカ豚コレラウイルスに対しては、炭酸ナトリウム、水酸化ナトリウム、次亜塩素酸塩、界面活性剤、ヨウ素化合物などを成分とする消毒薬が有効である。

第14 家畜の再導入

蹄疫防疫指針第14を準用する。

第15 発生の原因究明

蹄疫防疫指針第15を準用する。

第16 その他

蹄疫防疫指針第16を準用する。